

短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用 に関する研究（1年次）

大分県教育センター教育相談部
指導主事 大久保 祐子

I 研究の背景

文部科学省の平成30年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」を受け、大分県の調査結果では、平成30年度小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数は、11,356件（前年度5,493件）と前年度より倍増し、児童生徒千人あたりの認知件数は92.4件（前年度44.2件）で全国2番目となった。これは、各学校が児童生徒の些細な変化を見逃さず、積極的にいじめを認知し、早期に対応してきた結果であると肯定的に捉えている。また、小・中学校の不登校児童生徒数は、1,599人（前年度1,355人）と増加の現状がある。その要因として小学生では、「家庭に係る状況」が全体の52.3%、次いで「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が20.5%、中学生では、「家庭に係る状況」は全体の28.9%となり、次いで「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が28.1%となっている。

これまでも大分県教育委員会は、児童生徒のいじめ・不登校の未然防止に力を入れてきたが、家庭や地域社会の大きな変化により、人間関係をつくるスキルを身に付ける機会が減少している。その現状を受け、県教育センターでは、平成27・28年度に冊子「大分県版人間関係づくりプログラム（小学校・中学校・高校編）」を作成し、全公立学校に配布した。これを各学校で活用することにより、魅力ある学校・学級づくりにつながるよう進めてきたが、「人間関係づくりプログラム」の定着には至っていない。

そこで、本研究では、よりよい人間関係づくりのため、この短時間の「人間関係づくりプログラム」の有効性や実施するにあたっての課題を明らかにすることをねらいとした。

II 調査・研究の目的

児童生徒の人間関係をつくる力の育成を目指し、組織的でより実践的な短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果を確認するとともに、学校において実施する上での課題を明確にすることを目的とした。

III 調査・研究の内容

1 研究協力校での「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」調査(1回目)の実施

研究協力校として、県内の公立小学校2校、中学校2校に依頼し、1回目の「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」（以下「アンケートQ-U」という）を5月に、2回目を11月に実施した。各学校の集団の特徴と課題を把握した。

2 研究協力校での短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施

研究協力校に、取り組みやすい時間に短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施してもらい、5月～1月の期間に各学校を月1回訪問し、実施後の研修で検討する内容や方法について助言を行い、課題を把握した。

3 研究協力校での2回の「アンケートQ-U」結果の比較

研究協力校での短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施前の「アンケートQ-U」結果（1回目）と、実施後に行った「アンケートQ-U」結果（2回目）とを比較することによって、短時間の「人間関

大分県教育センター調査研究報告書

係づくりプログラム」の実践効果について分析した。

4 研究協力校会議での研究協議

令和元年8月、10月、12月に、研究協力校4校の地域児童生徒支援コーディネーターを招集し、各校の短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施するにあたっての課題や課題解決に向けての研究協議を、大分大学教育学部 藤田 敦教授の指導助言を得て行った。協議で得た「人間関係づくりプログラム」を有効に活用するための方法を、各校にて実践に生かした。

5 短時間の「人間関係づくりプログラム」を活用するにあたっての課題

短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施するにあたっての教師へのアンケート調査を7月に1回目を行い、また実施後12月に2回目のアンケート調査を実施した(表1)。その結果を分析し、このプログラムの活用にあたっての教師側の課題を明らかにした。

表1 教師へのアンケート項目概要

1 短時間の「人間関係づくりプログラム」は効果があると思うか
「教師と児童生徒との関係づくり」・「児童生徒間の友達関係づくり」
「児童生徒間の友達関係づくり」・「学級の雰囲気づくり」
※「思わない」「あまり思わない」「やや思う」「思う」の4段階で回答。
2 短時間の「人間関係づくりプログラム」に取り組み、児童生徒の変容を感じるか
※「感じない」「あまり感じない」「やや感じる」「感じる」の4段階で回答。

IV 調査・研究の結果

1 研究協力校での1回目の「アンケートQ-U」調査の結果

表2 研究協力校4校の児童生徒の実態

	A 中学校	B 中学校	C 小学校	D 小学校
学年	3年	2年	6年	4年
実態	「ゆるみのある学級集団」と判定。承認得点は全体的に高いが、被侵害得点には差が見られ、ルールや行動規範の定着が不十分な面がある。	満足度に格差がある学級集団。学級満足度群は全国平均よりかなり高いが、侵害行為認知群も全国平均より高く、規律と人間関係が不安定。	「かたさのある学級集団」と判定。被侵害得点は全体的に低く非承認群が全国平均より高い。承認得点に差が見られ意欲的に活動する児童とそうでない児童とに明確に分かれる。	「かたさのある学級集団」と判定。学級満足群が全国平均より低く非承認群が全国平均より高い。級友や教師から承認される場面や楽しさを分かち合う場面が少ないと想定される。

2 研究協力校での短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施

研究協力校4校とも、「アンケートQ-U」「いじめアンケート」等の結果を分析し、校内研修や不登校・いじめ防止対策会議等で、個別に援助が必要な児童生徒の具体的な支援方法を考え、短時間の「人間関係づくりプログラム」もその支援方法の一つとして取り組んだ。構成的グループエンカウンターエクササイズとしては、「アドジャン」「二者択一」「すごろくトーク」等を行い、また、実施時のルールの中に「聴くスキル・話すスキル」をソーシャルスキルトレーニングとして取り入れ実践した。教師の負担軽減のため、実施の準備物等は各校の地域児童生徒支援コーディネーターが中心となって計画準備をし、校内研修で教師への体験講習も行った。

成果としては、短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施することで、①児童生徒の自他理解がすすんだこと。児童生徒から「相手の気持ちを聞き、また自分の気持ちを話すことが楽しい」という声が多く聞かれ、友達への関心が高く、普段話さない友達と話すようになったことは自他を知る上で有効であった(児童生徒からのアンケートで把握)。②ワークシートや振り返りシートの随時改善を行ったこと。③発達障がいのある児童への個別支援の工夫等、児童理解に繋がったこと。④教材を共有フォルダに入れ各教師が活用できたこと。⑤実践を継続することで、効果に広がりが出てきたことが上げられた。

3 2回の「アンケートQ-U」の比較

研究協力校4校が、短時間の「人間関係づくりプログラム」の実践前後に2回目のアンケートを行い児童生徒の変容を見た。学級生活意欲尺度の2回目の学級満足群は、1回目より増加した学校が2校、低下した学校が2校、侵害行為認知群は1回目より低下した学校が2校、増加した学校が2校、非承認群は、1校が低下し、2校が増加、1校は変化がなく、学級不満足群は2校が低下し、1校が増加、1校は変化がなかった。

だが、図1の承認得点（周りから認められているか）については、4校とも上昇していた。実践後の児童生徒の振り返りの中でも、「みんなが自分の意見を聴いてくれた」「友だちの知らなかった部分に驚いた」「すごいと言われて嬉しかった」等の感想が多数あり、毎回9割前後の児童生徒が「楽しかった・とても楽しかった」の感想を持ち、自分の存在や行動が級友や教師から認められ、所属感も高められていることがわかる。また、図2の被侵害得点（不適応感やいじめや冷やかし等を受けていないか）は、4校全ての学校が低下している。これらのことから、短時間の「人間関係づくりプログラム」を活用しての実践の効果は認められると考える。

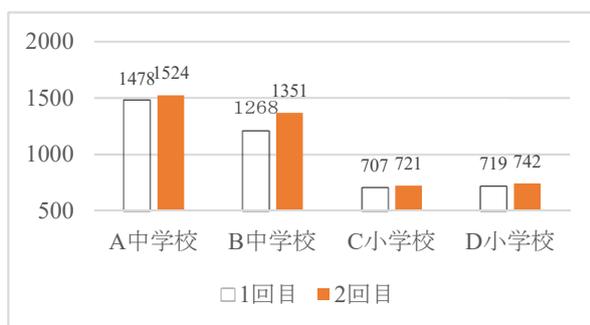


図1 承認得点

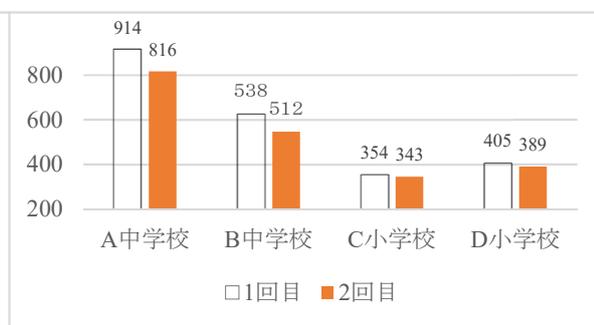


図2 被侵害得点

だが、承認得点は上がり、被侵害得点は低下してきたとはいえ、学級不満足群や侵害行為認知群にいる児童生徒に対して、日々の個別対応が必要である。学校生活の中でのその支援の一つとして、短時間の「人間関係づくりプログラム」を継続して実践していくことで、学校教育全体を通じて、児童生徒個々の承認得点も伸びていくと考える。

4 研究協力校での校内の実践体制の構築

各学校が、短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施しての「アンケートQ-U」や成果からもわかるように効果があるとは認識しているが、実施上の課題として、「時間がない」「やり方がわからない」「一歩が踏み出せない」など教師の負担に感じる声も聞かれた。研究協力校会議での協議と大学教授からの指導助言を受け、教師が一歩を踏み出し、児童生徒が安心して過ごせる居場所としての学級づくりに生かせるようこのプログラムを活用するにあたっての校内推進体制の構築が課題であると推察した。

5 教師へのアンケート結果から見える課題

研究協力校4校の教師52人に、短時間の「人間関係づくりプログラム」の実践前後でアンケート調査を行い、以下のような結果が見られた。

短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果について、図3から、①「教師と児童生徒との関係づくり」(94%) ②「児童生徒間の友達関係づくり」(98%) ③「学級の雰囲気づくり」(96%) ④「学級内での児童生徒の居場所づくり」(94%) の4つの質問事項では、

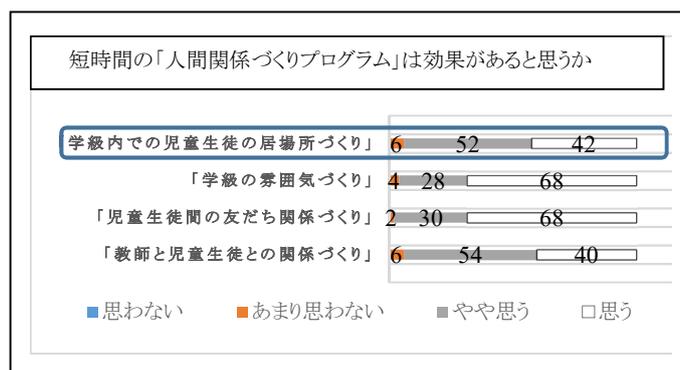


図3 教師へのアンケート

大分県教育センター調査研究報告書

「やや思う・思う」を合わせると4つの質問全てに9割以上の教師が効果があると回答。その理由としては、「教室に居づらいつ感じている子どもにとって、継続的に行えば少しずつ居場所見つけになる」等があった。また表3の「短時間の『人間関係づくりプログラム』に取り組み、児童生徒の変容を感じるか」の質問事項に対しては、9割以上の教師が「やや感じる」「感じる」と回答した。この短時間の「人間関係づくりプログラム」を行った成果としては、「仲良しでない人とのグループづくりへの抵抗が減った」「否定的な意見が減った」「普段目立たない子どもが表に出ることがある」「子どもたちが学校で楽しいと感じる時間が増えた」「学級経営の中の一つとして、必要な時に適切に取り組めば、他者を認める力が育つ」等、教師自身がこの短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果を実感できたのではないかと考える。一方、課題としては、「考えや動きに慣れず、ギクシャクする」「テンポよくできない」「ルールが定着しない」等、教師自身の困りを解決していく支援が必要であると考えられる。

『「人間関係づくりプログラム」に取り組み、児童生徒の変容を感じるか』	
1 感じない	0%
2 あまり感じない	10%
3 やや感じる	41%
4 感じる	49%

表3 教師へのアンケート

V 考察

1 成果

本研究での短時間の「人間関係づくりプログラム」の活用については、研究協力校4校の「アンケート Q-U」結果の分析や実施結果から、短時間の「人間関係づくりプログラム」は、児童生徒の変容も見られ、学級づくりを行う上で有効であると認められた。

また、短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用を行うために、①学級経営との関連性②児童生徒の「楽しい」と感じるポイントの把握③校内の共有フォルダを利用（実施内容・指導案・基本的な手順・ワークシートと振り返りシートの改善）④実施時のルール（他教科にもつながる）の明確化⑤クラスの実態に応じた活動内容（個別対応が必要な児童生徒への配慮・言葉かけの工夫）⑥リーダーシップをとる教師が必要であると考えられる。

2 課題

今回の調査研究で、①どの時間に組み込み継続実施していくか②教師の実践の積み重ね③各市町村内の情報共有フォルダの活用の3つの課題があり、①は、学校が校内推進体制づくりを進めていく中で解決できるのではないかと、また③についても各市町村の教育委員会が対応できるものと考えられる。②については、教師への研修を積んでいく必要がある。

さらに、今後地域に拡充していく上での課題を克服する手立てとして、1つ目は、地域児童生徒支援コーディネーターや教育相談コーディネーターが、各学校で短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施について、リーダーシップを発揮し、教師の支援をしていただけたらと考える。2つ目は、短時間の「人間関係づくりプログラム」の継続可能な校内体制の構築である。2つ目の課題については、1つ目の課題を取り組む中で校内の体制づくりの支援ができると考える。この「人間関係づくり」は、人との関わりの中で、ゆっくり育まれるものである。実践を継続し続けることで、人との関わり方のスキルを少しずつ身に付け、いじめ・不登校の未然防止につながると考える。

VI 参考文献等

- ・「平性 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）
- ・「構成的グループエンカウンター事典」図書文化（國分康孝・國分久子）